

氏 名	堀 伸 一 郎
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	医 学
学位授与番号	博乙第 4096 号
学位授与の日付	平成18年3月24日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	Endoscopic therapy for bleeding esophageal varices improves the outcome of Child C cirrhotic patients (Child C肝硬変患者に合併した食道静脈瘤出血に対する内視鏡治療は有用である)
論文審査委員	教授 小出 典男 教授 金澤 右 助教授 猶本 良夫

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

肝硬変患者において食道静脈瘤出血は致命的となりうるため静脈瘤のマネージメントは非常に重要である。我々は食道静脈瘤出血を来し、内視鏡的治療を施行した77名のChild C肝硬変患者を対象として患者の予後に寄与する因子を解析した。77名の患者のうち57名に出血後24時間以内に内視鏡的止血術を施行した。残りの20名は出血後24時間以降に内視鏡治療が施行された。57名の止血率は97%(55/57)であった。出血後6週間以内の死亡に関わる因子は血清総ビリルビン値>3mg/dl、再出血であった。血清総ビリルビン値>3mg/dl、難治性の腹水合併、肝癌の合併は出血後6週間以降の死亡に関わる因子であった。食道静脈瘤出血を来したChild C肝硬変患者に対する内視鏡的止血術は有用であった。本研究においてこのような患者の予後は背景肝の肝予備能と、肝癌の存在に左右されることを示した。

論 文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は、Child Cの肝硬変患者に合併した食道静脈瘤出血に対する内視鏡治療が生命予後に有用であるか否かを検討した研究である。止血率は97%と良好であり、止血手技に関してEUS/EISLとEVLとの間には止血率において有意差は認められないとしている。出血後の生存率では6週間で76%、1年で44%、3年で26%であったとしている。本邦では食道静脈瘤出血に対して内視鏡治療を行わず保存的療法で経過を観察する症例は無いことから、内視鏡治療が他の療法と比較して生命予後を改善したとする成績は得られていない。出血後の死亡原因としては6週間以内の死亡には血清ビリルビン3mg/dl以上と再出血が有意な因子であり、出血後6週間以降では血清ビリルビン3mg/dl以上、難治性の腹水合併、肝癌の合併が有意な因子であった。出血後6週間以内の再出血が短期予後の重要な因子であったが、長期的予後の上からは必ずしも重要な因子とはならないとも結論している。Child Cの肝硬変患者に合併した食道静脈瘤出血に対する内視鏡治療成績は諸外国では比較検討すべき論文が少なく、本研究は重要な知験を得たものとして価値のある業績であると認める。よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。